

BOOK REVIEW

流用

稀有の博物学者、探検家は
もっと知られていい

『フンボルト 自然の発見者（上・下）』

アンドレア・ウルフ 著 / 鍛原 多恵子 訳

アレクサンダー・フォン・フンボルトの生誕から百年後の1869年9月14日、彼の業績を讃える生誕百年祭は、世界各地で盛大に催された。ヨーロッパ、アフリカ、オーストラリア、南北両アメリカで華々しく祝賀会が開かれた。最大級の祝賀ムードで沸き上がったのはアメリカ合衆国。国中で行進や豪華な晩餐会、コンサートがあり、ニューヨーク市では「石畳の街路に旗が飾られた。市庁舎には横断幕が張られ、フンボルトの顔を描いたポスターで家並みが隠れてしまった」そうだ。

それほど高く評価されたフンボルトであるが、現在、"Who is Alexander von Humboldt ?" と訊ねられたとき、一部の学术界を除き、誰が的確に答えられるだろうか。彼は発明家ではなく、発見者でもない。それにもかかわらず、フンボルトがどうして現在に至るまで多大な影響を及ぼしているのか。その理由を知るのに、ぜひとも昨年末に文庫版(上・下)で出版された本書を手にとってほしい。

「ときに幅が数センチメートルになる細い山道を、一行はほぼ腹這いで進んだ」。このプロローグの書き出しを読んで、好奇心をくすぐられない人はいないだろう。えっ、本当の話？ それは1802年6月23日。フンボルト一行がアンデス山脈の一角にある標高約6300メートルのチンボラソ山を登っているときのシーンだ。冒険者、怖いもの知らず、勇気それとも無謀？ のっけからこうした規格外の人間像を紹介されれば、この伝記本をどうしても通読したくなるではないか。

本書は期待を裏切らない。フンボルト

は18世紀後半にプロイセン王国（現在のドイツの一領邦）の裕福な貴族の家に生まれ、博物学者および探検家として活躍した。著者は、フンボルトに関する文献資料が収蔵されている欧米の図書館、研究機関などに足を運び、収集した膨大なデータをベースに、彼の生涯の卓越した業績と抜群の行動力と尽きることのない情熱を余すところなく描き出している。

q.12 ミリケイ・スミタ（京下月）
フンボルトは、「生真面目で学問好き」の兄のヴィルヘルムと異なり、冒険好きで野外を好んだ。基本は体験的に自分の目で見ると、肌で感じるところにあった。この気質は生涯を通じて貫かれた。自然への熱狂的な関心と遠い国々への憧れは、実際に現実のものとなった。「33歳の彼は、3年以上を中南米で過ごしていた」とある。アンデスの地ばかりではない。後にはロシア、中国と蒙古の国境まで、雄大かつ荒々しい自然の探索とその観察、調査、測量、収集の旅に赴いた（南北両アメリカおよびロシアの旅のルート図が掲載されている）。

最大の特徴は、フンボルトがこれらの
 夥しい旅から得た独自の自然観にある。
 学問分野が分化・独立していった18世

紀において、著者が「私たちの自然観を根本的に変えた」と評価する、「総合・全体」という観点から自然を観察し、それが「生命の網」でつながり一体となっている新たな自然概念を生み出した。換言すれば、自然科学と精神科学の融合である。この観点から後に集大成として文字どおり宇宙的規模を誇る『コスモス』(1845～1862)という5巻の大著が執筆される。

この自然観を生み出すに、ゲーテやシラーなどのドイツ古典主義作家との日常の親交やカント哲学への傾倒がいかに重要な役割を果たしていたかということを記した『第一部 旅立ち—アイデアの誕生』は、ドイツの知性が最大限に光り輝いていたこの時代の魅力を存分に示し、心を躍らせずには読めない。

本書の眼目のひとつは、フンボルトの自然観が現代においても焦眉の課題となっている「環境哲学」という概念の源流に位置していることを論じたところにある。著者は、それをダーウィン、ソローほか、現在もよく知られた後世の著名な科学者、思想家、芸術家などの学説をほぼ下巻のほとんどを費やして紹介、解説しながら、いかに現代にいたるまで多大な影響を及ぼしたかを論述する。レイチェル・カーソンの『沈黙の春』やジェームズ・ラブロックのガイア理論などにも言及している。こうした影響関係を知れば、フンボルトの自然観の今日的な意味は、いくら強調してもしすぎることはない。フンボルトは、もっと知られ、もっと読まれてしかるべきである。

関本 英太郎

12a 見出し MB 3!
(以下同)

料で知的な大人の振る舞いに酔う \sim 80%+20%

『男のポケット』

丸谷 才一 著

36
本書は、約50年前に、作家が日々の暮らしの中で感じたことを飾らず書き留めた随筆集である。とり上げる話題は、著者が専門とする文学はもちろん、花鳥風月、映画、歴史、食、酒、野球など幅広く、その雑談の奥深さにも驚かされる。つつこみも鋭く、面白い。半世紀も昔のことなのに世相はそう変わらないのか、今でもうなずける話が多い。本欄にしては珍しく、古書店でしか入手できないこんな古い本を再び読んだのには訳がある。答え合わせがしたくなったのである。

本書は中高生の頃に読んだ。内容については表題の「男のポケット」の話だけは覚えていたが、ほかはすっかり忘れていた。しかし、本書の全体の印象ははっきり覚えていた。かっこいい大人に憧れたのである。東京の都会で繰り広げられる文化的生活がまぶしかった。著者はすでに文筆家として名を成し、各界に友人がいて、趣味が広く、まさしく博覧強記、海外事情にも通じ、機転が効き、発想が自由で、ユーモアに溢れ、とてつもなくかっこよく感じた。当時書評子が住んでいた家の裏は畑で、通学路は田んぼのあぜ道で、水路や井戸に落ちないように気をつける日々を送っていた。文化の抛り所といえば、遠く離れた駅前商店街の本屋と古本屋と貸しレコード屋とラジオだけだった。本書の著者のような文化人は身の回りにおらず、本書で描かれる粋な暮らしに大いに憧れた。自分もいつかそんな大人に、なりたいたいとも思っていなかった。とにかくまったく次元が違う別世界で、自分と重ね合わせることができなかったのだろう。

そんな書評子もいつの間にか肩書だけは部長と一見偉そうになり、一応麻酔はできる体<ルビ：てい>で仕事をしているが、物事を考えている頭の中は中高生の頃から成長した気がしない。そこで思いついた。少しでも大人に近づけたのか、本書を読み直して答え合わせをしようとしたのである。ふふふ、これはもう読む前から答えは明かかて、つまり、大人になれていない自分を笑おうとしたのである。このように自分を蔑めて「あかんあ」と自虐的に笑うことができるようになったのは、中高生の頃から成長したというより、墮落である。

書評子はすでに本書執筆当時の著者の年齢を越えているのだが、予想どおり、天と地の差を感じた。今読んでも「こんな大人になりたい」と思ってしまう。中高生の頃とまったく同じである。ところが、この答え合わせをしようと思いついたときに、大切なことをすっかり忘れていた。本書の著者は、東京大学文学部を卒業し、数々の名作を残し、ありとあらゆる文学賞や文化勲章などをもらい尽くした超のつく巨人である。月とスッポン比べること自体が間違っていた。何と恥

ずかしい。自らの成長を確かめようにも、その成長が誤差にしか思えないほどはるかに高い所に著者はいたのである。著者は本書のような随筆も数多く残しており、どれもお勧めできる。外れがない。古本屋で見かけたら手に取ってみてほしい。挨拶も名人だったらしい。

本も映画も、繰り返し読んだり観たりすれば、その度に新しい発見がある。時代も自分も変わるのだから、当然である。本書を40年ぶりに読んで気づいたことはたくさんあるのだが、その一つは、戦争である。文化的で知的な言葉の背景には、平和への喜びが溢れているように感じてならない。中高生の頃に読んだ、この丸谷才一、井上ひさし、筒井康隆、星新一、手塚治虫、ちばてつや、モンキー・パンチ、司馬遼太郎、有吉佐和子、山口瞳、松本清張などは戦争を経験していて、根底に「戦争だけは絶対にダメだ」という強い信念があった。作品の端々から、平和のありがたさを噛み締めている様子がうかがえた。田中角栄は「戦争を知っているやつがいるうちは日本は安心だ。戦争を知らない世代がこの国の中核になったときが怖い」と言った。その予言は的中している。1945年から80年が過ぎ、実際に世界中で戦争があり、日本でも威勢のよい声が聞こえてくる。書評子は特定の宗教や政治団体を推す者ではない。本欄でお隣付き合いをさせていただいている両氏と同じく、ただ平和を望む。大人の答え合わせのはずが、こんな感想を抱くとは思ひもしなかった。

(以下) { 2H } 水谷 光 < 2H
(市立貝塚病院 麻酔科・中央材料室) → 10a
新北

◆ブックレビュー

流

A diagram showing three rows of 20 squares each, with a red bracket on the left indicating a group of three rows.

（流行以下同）

BOOK REVIEW

流行

あなたと家族とは みな箱舟に入りなさい (聖書 創世記)

20%
B本 B101

80%
+
20%

『絶滅の発見』

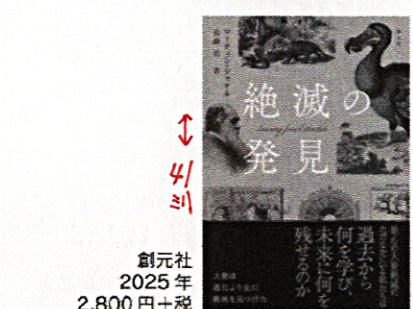
マーティン・ジャナル, 真鍋 真 著

著者のうち、真鍋は国立科学博物館の恐竜の先生として恐竜ファンにはお馴染みである。もう一人のジャナルは米国の古生物学者で、真鍋と『種の起源』について話していたときに本書のアイデアが生まれたという。本書は二人の共著であり、真鍋は日本語で記述し、ジャナルが英語で記述した部分は真鍋が日本語に翻訳している。

地球上には多数の生物が存在しているが、その生物とそれを取り巻く環境の間に著しい不調和が生じると、そこに新しくできた環境に上手に適應できない生物種は滅びるしかなく、その地域内あるいは地球上のすべての場所において存在しなくなれば、「絶滅」ということになる。絶滅には単一種の絶滅もあれば、生物種の多数が短時間で失われる大絶滅（75%以上が一つの目安らしい）もある。生命の歴史34億年の間には5回の大絶滅があり、現代は6回目の大絶滅に向かっている途上ではないかとの懸念がある。

「一絶滅も存在しない」というドグマは実は証明不可能なのであり、例えば人の目の届かない秘境でニホンオオカミはまだ生きている、と夢想するロマンチストは常にいる。しかし「どうやら〇〇はいなくなったようだ」と人々が気づき、それに対し説得力のある反論ができなくなったとしたら、その時点で絶滅を「発見」したといえるだろう。「最近姿を見なくなった」から「その生物は一絶滅も存在しない」という結論への思考の飛躍を論理立てて説明できるようになるまでは、絶滅はまだ可能性の段階にとどまるのだが、不幸なことに悪い予感というのは得てしてあたるものである。

絶滅という現象に人類が初めて気づい



たのは、どうやらドードー鳥らしい。かつてモーリシャス島だけに住んでいたこの飛べない鳥は、大航海時代に人類によって捕食され、また島に持ち込まれたさまざまな外来生物により環境を破壊されて、ほどなく一絶滅も存在しなくなった。人類との接触後ほぼ80年で1681年頃のことという。いなくなったことは、もともと生存範囲が限定的であったことと、ヨーロッパ（主に英国）で標本や学術的な記載が残されていることで確認できる。後者の要因は、知的好奇心とその対象物の収集という行動が人類において普遍化してきたことを意味しており、データ収集、学術団体の創設、出版を通じた知識の交換・共有といった、現代の研究システムができつつあった時代を背景としている。

ドードー鳥の絶滅は現生人類にとってリアルタイムの出来事であったが、「化石」の意味がわかるようになると、さらに過去に遡れば多くの生物種が絶滅したという事実が人類は気づいたのである。化石の存在そのものは昔から認識（例えば伝説にある「竜の骨」だとか）されていたが、その意味がわかるようになったのは1796年にキュビエが、マンモス化石を絶滅種の痕跡だと記載したのを嚆矢

とする。そしてチャールズ・ダーウィンが『種の起源』を出版したのは1859年のことであるから、人類は進化より先に絶滅を知ったといえる。キュビエも、マンモスはノアの洪水によって子孫がなくなった生物だと考えていたようだ。

チャールズ・ダーウィンは19世紀の英国人である。「大英帝国に太陽の沈むときはない」と豪語するほどに地球上の広い範囲を領土とし、物品を収集し、さらに学問体系を構築していったこの国、この時代において、自然史研究は黄金時代を迎えたのであり、ダーウィンの登場によって、生物種の繁栄と絶滅は時間経過の中で自然現象としてあり得ることと理解されるようになった。つまり神の意志という概念を介在させる必要がなくなったということであり、キリスト教国家においては再度「コペルニクス的転換」を余儀なくされたのである。

そして20世紀になって大絶滅が発見された。しかしこれまでに5回あった大絶滅は、新しい進化の始まりでもある。本書とは直接関係しないが、ドゥーガル・ディクソンという地質学者が著した『アフターマン—人類滅亡後の地球を支配する動物世界』（今泉吉典監訳、ダイヤモンド社、2004年）、『フューチャー・イズ・ワイルド』（ジョン・アダムスと共著、松井孝典監訳・土屋晶子訳、ダイヤモンド社、2004年）という二冊の快著（怪著？）は、人類が絶滅して数百万年～数億年後の地球がどのような環境になり、そこでどのような生物がどのように活動しているか、を想像したものであり、非常に刺激的である。

福家 伸夫
(帝京大学ちば総合医療センター)